HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「見知らぬ場所」に生きる ： Jhumpa Lahiri の短編作品における「新アメリカ人」の越境とグローバリティ
著者	渡部，あさみ; WATANABE, Asami
引用	北海学園大学人文論集(66): 49-79
発行日	2019-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「見知らぬ場所」に生きる
── Jhumpa Lahiri の短編作品における「新アメリカ人」の越境とグローバリティ

渡　部　あさみ

本論はインド系アメリカ人女性作家 Jhumpa Lahiri の短編作品集から，“Unaccustomed Earth”（「見知らぬ場所」）と“Hema and Kaushik”（「ヘーマとカウシク」）の物語を取り上げ，彼女の作品と登場人物のグローバリティとアイデンティティについて考察する。[1]「新アメリカ人」と呼ばれる Lahiri のディアスポラの登場人物たちについて，短編作品の分析に加えて最新作の Lahiri の自伝的エッセイである *In Other Words*（『べつの言葉で』）を参照し，作者の経験と創作との関係についても検討する。[2] このことにより，Lahiri の作品と登場人物の表象が，既存のアジア系アメリカ文学の枠を越え，現代の「アメリカ」および「アメリカ人」についての示唆に富むものであることを検証したい。

アメリカ文学や映画において「移動」は主要なテーマとされてきた。アメリカの歴史は移動に満ち，世界中の多くの人々を「アメリカ」へと誘う。初期のヨーロッパ系の人々による移動の主な動機は政治的，宗教的理由からであり，その後，「アメリカン・ドリーム」や「明白なる天命」などの神話的な誘惑は経済的欲望と競争原理を背景とし，「アメリカ」生成の原動力となってきた（山里 1–2）。アジア系アメリカ人の歴史もまた移動に特徴づけられ，アジア系アメリカ人は「移動」と「変化」を具象化するグループと言われる（ハマモト 2011）。しかし，それはヨーロッパ系アメリカ人による「移動」とは異なるものであった。主流文化における「移動」は，自立，自由，自己実現や社会的躍進の機会であったが，アジア系においては，服従，抑圧，自己実現やコミュニティ形成の失敗であり，必要に迫られたものであった（Huan 2006）。アジア系アメリカ人は，19 世紀半ばから

中国系移民や日系移民たちが国家に労働力を提供し，アジア各地における戦争や政治経済の混乱から逃れた難民が移住した。また，1965年の移民法改正により，ポストコロニアルな状況に置かれた国からの移民も急増し，「新アメリカ人」(New Americans) と呼ばれる新しい移民がアメリカのエスニック人口構成を大きく変化させた。その中で，インド系の多くは1965年以降に移住した「新アメリカ人」と呼ばれる移民である。移民の歴史が長い中国系と日系とは違い，移民前から英語を話す人々も多い。移民法改正以降，インド系の人口は激増し，中国系，フィリピン系に次いでアジア系として3番目に人口が多い (Waters et al. 2007)。[3] 現在，アジア系人口は1000万人を越え，20以上のサブ・エスニックグループが存在している。旧移民の多くは農業従事者を中心として，文化・社会的階層を均質的に構成していたが，新移民は同一民族間においても言語，宗教，文化の違い，教育レベル，職業，資産，階層などの文化的差異が見られて多様である (植木 xiii)。

アジア系アメリカ人口の増加と多様化はアジア系アメリカ文学発展に寄与してきたが，このような集団を単一のカテゴリーとすることは従来と比べて困難になっている。かつてはより肯定的なアイデンティティとイメージを打ち出し，協働するために政治的に導入された背景があったが，現代の新移民やその家族にとっては，その固定的で均質的なカテゴリーが否定的に捉えられてきている。現代の移民の多くがポストコロニアルな状況の中で，より良い生活を希求するディアスポラの境遇にあり，アメリカとの関係においても旧アジア系移民と比べて流動的であることによる (小林 438-39)。南アジア系ディアスポラの現状としては，自由と機会を求めてアメリカに移住したものの，差別や偏見に直面した結果，アメリカに対し「ディストピア的緊張関係」を持つようになった。そのような人々は祖国とアメリカの両国に距離を置く中間的存在となり，ディアスポラの生き方を探る人々も多い (有馬 134)。南アジアからのアメリカ移民は「アメリカ人」になることや，アメリカ人としてのアイデンティティを必ずしも求めてはいない。これらの人々は創作においては，自分たちのディアスポラを

描くことが中心的テーマとなり，その観点から新しいタイプの移民ということができる（杉浦 20）。

Jhumpa Lahiri と家族は，彼女が 3 歳のときにコルカタ出身の両親がロンドンからアメリカに移住した「新アメリカ人」である。彼女がピューリツァー賞を受賞した第 1 作目である *Interpreter of Maladies*（『病気の通訳』1999），そして第 2 作目の *The Namesake*（『その名にちなんで』2003）も高く評価され，映画化されるなどしてアジア系アメリカ文学のサブ・カテゴリーである南アジア系アメリカ文学のみならず，現代アメリカを代表する作家の一人として注目されている。第 3 作目となる本作は，それまでの 2 作が舞台としていたアメリカおよびインドをはじめとする南アジアの領域を越え，グローバルなディアスポラを描いている。また，最新作となる *In Other Words* は，2011 年にローマに移住した Lahiri がイタリア語で書いたエッセイであり，本作はこれまでの小説との関わりにおいて，直接的に言及してこなかった Lahiri 自身のアイデンティティと言語の関係を探求する内容である。

Eleanor Ty は *Unfastened*：*Globality and Asian North American Narratives* において，アジア系のディアスポラ作家による物語の重要な特徴を「グローバリティ」とし，これらの作品を “Asian global narrative”（130）と名づけている。ここでの「グローバリティ」とは，グローバル経済，政治，文化，環境に特徴づけられた社会的状況であり，多くの既存の境界を無効なものとする流れである。ディアスポラにあるアジアの人々は，もはや単純に国家，文化，エスニシティに縛られることはなく，セクシュアリティ，ジェンダー，階層，宗教，教育，健康，年齢など複数の要因から成る複数のアイデンティティを生きていると指摘する。このようにグローバルかつコスモポリタンな側面を強調したアジア系による作品は，近年顕著である国と文化の枠組みを超えた「流動性」の示す可能性を明らかにするものである（142）。そして，国籍やアイデンティティとの関係があいまいになるという，ディアスポラに伴う移動からもたらされた変化により疎外や孤独を感じている人々は，いかにその問題に対応しているのか

を示す物語を必要としている。これらの人々の日常の物語は，どのように人々が文化的な障壁を取り崩し，境界を越えて複雑さと向き合い，乗り越えて行くかについて語るものである（xii)。現代において「移動」は世界的に広がる現象であり，結果として多くのディアスポラ・コミュニティが形成され，アイデンティティが構築される傾向にある。それらのディアスポラのそれぞれの経験の違いに注目し，検討することは重要な課題である(Bromley 8)。

Lahiri もまたディアスポラのアジア系作家であり，彼女の作品は現代のグローバリティを表象する代表的な作品であると位置づけられる。“Unaccustomed Earth”を含む Lahiri の短編作品の先行研究としては，アイデンティティの表象と関わり，移民経験と結びつけられている死について（Chakraborty 2011)，短編作品の「女性中心主義」について（Saxena 2012)，ポストコロニアルな「第三の空間」(third space）について（Farshid 2013)，短編小説という形式とディアスポラ主体の物語の関係（Chartterjee 2013)，作品中に Lahiri が引用したアメリカ作家 Nathaniel Hawthorne との関係について（Taher 2016）の研究がある。*In Other Words* に関しては，エッセイを「自伝」と位置づけ, Lahiri の「複層的アイデンティティ」(multi-layered identity）と言語の関係について（Lutzoni 2017）の研究がある。

これらの先行研究を踏まえ，本論においては登場人物のグローバリティとアイデンティティを中心に検討する。その際に自伝的エッセイである *In Other Words* から Lahiri 自身のグローバリティとアイデンティティについての考え方を参照し，“Unaccustomed Earth”および“Hema and Kaushik”のディアスポラ主体の表象との関係について論じる。

“Unaccustomed Earth”と“Hema and Kaushik”について

“Unaccustomed Earth”（2008）の主要な登場人物はインド系アメリカ人の父と娘である。娘である Ruma は，3 歳の子どもを育てる妊娠中の弁護士で，Ruma の父はアメリカの製薬会社を退職した移民 1 世である。アメ

リカ人の夫の仕事に伴ってシアトルに移動した娘を父が訪ね，１週間滞在する間の物語である。父は妻の死後，長年の勤めを退職し，ボランティアをしながら単身でペンシルバニアのアパートに住み，海外旅行を繰り返している。父は滞在中，積極的に Ruma の家事の手伝いをし，孫の面倒を見る。Ruma はインドの慣例に配慮し，父に同居を申し出るが断られる。父が帰った後，父が女性に宛てて送ろうとした絵葉書を見つけ，それにより，Ruma は父について知らなかった一面を発見する。

“Hema and Kaushik”（2008）は２部構成となる短編作品集 *Unaccustomed Earth* の後半の部であり，Hema と Kaushik という２世のインド系アメリカ人男女の成長物語をテーマとする３つの連続した短編作品（“Once in a Lifetime,” “Year’s End,” “Going Ashore”）から構成されている。Hema は少女の頃に古代ローマ文明に関心を持つようになり，後に考古学者としてウェルズリー大学に職を得る。Kaushik は大学時代に母を乳がんで亡くし，マサチューセッツからカナダ国境へあてのない旅をする。大学卒業後，南米を放浪し，フォトジャーナリストとなり，世界各地の紛争などを取材する。Hema と Kaushik はアメリカのインド系コミュニティにおける家族同士のつき合いにより，幼い頃に知り合った。Hema は Kaushik に恋心を抱いていたが，Kaushik の母が病を患うようになってから家族同士は疎遠となった。成人した Hema と Kaushik は仕事に関わりローマに滞在していたときに呼ばれたパーティーで偶然再会し，つき合いが始まることとなる。その後，Kaushik は新聞社の写真デスクの仕事で香港の赴任地に行く途中，タイで休暇を過ごしていたところに災害に遭う。

Lahiri の「新アメリカ人」であるディアスポラの登場人物たちの移動はアジア系アメリカ人の歴史に多く見られた経済的困窮や政治的迫害などを理由とするものではなく，アメリカ移住は機会の拡充のためである。登場人物たちは，観光，出張，転勤，研究休暇などで移動し，行先は国内外のインド系コミュニティから世界的な観光地まで幅広い。さらに，地理的な移動に伴い，身体，階層，生死，過去／現在など，さまざまな境界を越える登場人物たちが描かれており，インド系のディアスポラのグローバリ

ティが前景化されている。Lahiriの作品はフィクションとされているが，Lahiriは「インド系アメリカ人であること」についての自身の経験と葛藤が創作の発端であり，継続的な主題となっていると語っている。[4] 本論の2つの物語における女性主人公であるRumaとHemaについても作者との共通点が見られる。HemaはLahiriと同じ年齢に設定され，アメリカでの生育歴も同様であり，Rumaについても子育て経験をはじめとして共有する背景が多く，作者自身が投影されていることが推察される。

登場人物と旅

作品では，人，物，情報は世界中を移動し，主人公たちはローカルであると同時にグローバルな生活を営んでいる。“Unaccustomed Earth”と“Hema and Kaushik”の短編作品の主要登場人物は，定期的で慣例となっているインド帰省から始まり，世界各地に旅をし，生活している。“Unaccustomed Earth”においてRumaの父は，娘を訪ねるために初めて降り立つ西海岸のシアトルで1週間を過ごす。父は旅行には全く興味がなかった人であったが，突然亡くなった妻と娘が行くはずのフランス旅行に代わりに名義を変えて行ったことがきっかけとなり，一人でツアーに参加するなど，観光を繰り返し行うようになった。1年だけで観光でフランス，オランダ，イタリアに行き，今後はプラハやメキシコ湾のクルーズに行く計画がある。Rumaの弟は大学卒業後にフルブライト奨学金を得て外国に行き，ドキュメンタリーを制作するドイツの映画会社に勤め，現在はニュージーランドに駐在している。彼はアメリカを離れて長く，海外に行ったきりとなっている。

“Hema and Kaushik”においても，インド系アメリカ人の登場人物にとって移動は日常の一部である。Hemaは子どもの頃に関心を持った古代ローマの研究を行う考古学者であり，旅行や調査でイタリアを数多く訪問している。Kaushikは大学生のときにマサチューセッツからカナダ国境までの逃避の旅をする。その後の大学卒業後に，南米を放浪，メキシコ，グアテ

マラ，エルサルバドルに行き，AP 通信の契約特派員となり取材を行う。そして,「ニューヨークタイムズ」に雇われ，フォトジャーナリストとして，アフリカ，中東，などの戦地をまわり，ローマで Hema と再会する。写真デスクの仕事で香港の赴任地に行く途中，タイで休暇を過ごすなど，各地に旅行し，働きながら生活していて拠点を定めない。

小説の主人公である Ruma の父，Hema，Kaushik が，それぞれ一人旅を経験する様子が描かれている。これらのアメリカ国内や海外においての経験は，それまでのアメリカでの生活では感じることができなかったものである。アジア系アメリカ人の歴史において，多くの人々が行ってきた強制的な「移動」とは異なり，自立を象徴し，自由を謳歌できるような経験として描かれている。

> How freeing it was, these days, to travel alone, with only a single suitcase to check. He [Ruma's father] had never visited the Pacific Northwest, never appreciated the staggering breadth of his adopted land. (7)

Ruma の父はかつて妻と娘に対して，自身が十分に理解されていないと考え，疎外感を強めていた。彼は妻の亡き後は独り身となり，旅をすることでかつてない自由と解放感を得ている。父は娘に会うためのシアトルへの旅で，インドから移住した東海岸から初めて娘の住む西海岸の北部へと旅をして国土の広さを認識し，「アメリカ」を再発見している。

Kaushik については，父が再婚し，新しく 2 人の連れ子を迎えた家で自己嫌悪に陥るような気まずい言動をしてしまったことをきっかけに逃避する。その時の放浪の旅が，その後の人生にも影響を与えている。

> I [Kaushik] did not crave anyone's company. I had never traveled alone before and I discovered that I liked it. No one in the world knew where I was, no one had the ability to reach me. It was like being dead, my

escape allowing me to taste that tremendous power my mother possessed forever. (290)

Kaushikにとって初めての一人旅は心地良い経験であり，見知らぬ土地での匿名性と孤独感も好ましく感じられている。また，そのような状態を「死」に例え，母が死んだことによって得た「力」として捉えている。Kaushikは旅をしたことにより，死んだ母に近づいたような感覚を得るという新しい発見をしている。

Hemaはお見合いに近い伝統的な形式で導かれた結婚を控え，結婚相手には別の理由を説明し，イタリアにおいて初めての海外での一人暮らしをして研究休暇を過ごす。終わりを告げようとしている一人の生活が「過去にもとらわれず，未来にも縛られない」(370) で，「さまざまな時間」(370) が「すぐ隣り合わせ」(370) になるようなローマという土地にあり，肯定的に孤独を味わいつつ，仕事をしながら日々を過ごしている。

Now she [Hema] was free of both of them, free of her past and free of her future in a place where so many different times stood cheek by jowl like guests at a crowded party. She was alone with her work, alone abroad for the first time in her life, aware that her solitary existence was about to end. In Rome she savored her isolation, immersed without effort in the silent routine of her days. (298–9)

これらの旅の経験は，これまでに至る過去の記憶を呼び起こす。旅先は過去や未来から切り離された場所であり，自身の人生を振り返る場となる。そして，登場人物が訪ねる土地は，これまでのインド系の人々にとっては，歴史的なゆかりのない土地であることが多い。Rumaの父は「いまはもう，どこにでもインド人がいるんだな」(54) と語るなど，インド系のディアスポラを意識させる。

このような一人旅による孤独感を楽しむ一方，移動は登場人物たちに新

たな発見と人間関係の（再）構築の機会をもたらす。Ruma の父は妻の死をきっかけに観光者として旅行を重ねるが，旅行は父にとって異国の文化に触れるだけではなく，新しい生活をスタートするきっかけと出会いを与える。妻とはインドの慣習として一般的な見合い結婚の相手であったが，夫婦関係には緊張感があり，不和も感じていた。その後に妻と死別し，海外旅行を重ねる中で，妻よりも心を通わせることができる自立したインド系女性 Mrs. Bagchi と出会う。また，Ruma を訪ねたシアトルでは馴染まない土地での子育てと妊娠で不安と孤独を感じる娘に心の安らぎを与えようとする。新しい家の庭で，昔家族で住んだ家にあったような植物や野菜を植え，Ruma が土地に根を張り，心身の安定した生活を営めるよう願い，庭作りを幼い孫と一緒に行う。また，孫の世話を積極的に行う経験を通じて，親近感と愛情を深めていく様子が描かれる。娘と父と視点の入れ替わる語りにより，たがいに境遇や心境を思いやり，シアトルでの滞在が，それまで確執と緊張感があった親子に歩み寄りの機会を与えていることが見えてくる。

“Hema and Kaushik”において，成人した 2 人の現在の物語の中では，共に主に仕事に関わって移動をしている。2 人の職業に関わる移動は，西洋資本のグローバル企業による利益追求の経済活動とは異なり，地元に密着した研究や取材の成果を世界に発信する仕事である。Hema と Kaushik はそれぞれの仕事の都合で滞在することを選んだイタリアという目的地で再会する。多感な時期に重要な経験を分かち合い，忘れがたい相手であった 2 人に関係の再構築の機会をもたらす。

移動のイメージと結びつく空港や航空機に関わる場面も多用されている。このことにより，登場人物たちにとってグローバルな旅は日常生活の一部であり，そのライフスタイルは定点を定めず流動的なものであることが強調されている。Ruma の父はスーツケース一つの預け荷物の身軽な一人旅を楽しむにあたり，過去の大荷物で繰り返した家族との東回りで行くコルカタへの帰省や，西回りでタイ航空のロサンゼルス経由便に乗り，タイで観光しようにも気力がなく体調を崩した長旅を回想する。そして，新

しく出会い，つき合いの始まった Mrs. Bagchi とはツアーでは夫婦のように一緒に過ごすが，「ツアーが終われば別の飛行機に乗って去っていく人」(17) としている。シアトルの娘の家では，時間つぶしに飛行機の座席ポケットから持ってきた機内雑誌を拾い読みしている。

Kaushik の家族もインドからアメリカに 2 度移住し，家を探す間に Hema の家族の家に住まわせてもらう。時差ぼけのまま，「二家族が反対の時間に寝たり，起きたり，一つ屋根の下なのに地球の裏表で暮らしているよう」(293) な昼夜逆転の生活をする。また，Kaushik の母のイタリアへの旅行や 40 歳の記念のプレゼントにインドからファーストクラスに乗ったことが話題となる。そのときにアメリカ行きに乗せられたはずの預け荷物のスーツケースがローマで見つかり，その後ヨハネスブルグ行きの便に乗せられ，紛失する。これらのことから，世界各地を人や物が移動することは現代において容易であり，登場人物たちにとってグローバルな移動は定期的に行われ，生活の一部となっていることがわかる。他にも Hema の物語では，フライトマップの映像が，未来への重要な決断に影響を与える場面がある。

> Then the fear turned numb. Already on the screen at the center of the plane there was a map with a white line emerging away from Rome, creeping toward India. And this simple graphic composed her, making clear the only road available now. (324)

将来にある 2 つの道で迷う Hema は，空港の保安検査場で幼少の頃から体の一部のように大事にしてきた金の腕輪を置いてきてしまう。不吉な予感となり，飛行機の中でも不安に思う。しかし，航空機内のモニターのフライトマップに映る地図の映像の中の矢印がローマからインドへの道を指し示していることを象徴的な意味と捉え，「進める道は一つしかない」(401) として受け入れる。フライトマップにより，不安感がまひして落ち着き，自身の進む道は決まっていることを確信する。このように登場人物たちの

人生において，旅や出張などによるグローバルな移動は日常的なものであることがわかる。

ライフスタイルとグローバリティ

日常的に旅をするこれらの登場人物たちは，グローバル化に適応した生活を営んでいる。さらにこの小説では人物だけではなく，ローカルな情報や物質がさまざまな方法でグローバルに旅する様子が描かれる。Hemaは，アメリカを拠点としながら，ローマにおいて謎の多い古代文明であるエルトリアの歴史の研究にのめり込んでおり，それを研究成果として発信している。Kaushikは世界各地で紛争地などの実情を取材・撮影し，その情報はウェブなどのデジタルメディアに載せられることによってグローバルに配信されている。HemaとKaushikはともに地域の文化と歴史について，世界に発信する職業に就いている。アメリカのKaushikの父は，息子の消息を新聞に掲載される彼が撮影した報道写真を通じて，毎日読んでいる新聞で知る。“Unaccustomed Earth”においては，１世世代も適応した生活を送り，新旧両方のツールを使ってコミュニケーションを取っている。Rumaの父はメールと絵葉書を利用していたが，ベンガル語で書いた絵葉書を誤ってRumaの家に残す。この絵葉書は父が新しく旅で知り合い，親しくなったMrs. Bagchiに宛てられていた。結末では，父が紛失した絵葉書は娘によって発見され，迷った末に娘の手により送られ，西海岸のシアトルから東海岸のニューヨークまで旅をし，父と娘の想いを女性に運ぶ結果になることが予想される。登場人物たちは，グローバル化に適応し，コミュニケーション・ツールとテクノロジーを利用して，世界中の人々とつながることができている。しかし，登場人物たちの心理的な距離は物理的距離と同様に容易に縮まるようには見られない。テクノロジーの進化は距離の溝を埋められず，これらの作品においては登場人物たちの関係性には距離感があり，親しく見える親子や男女の間に断絶があり，それぞれ十分に心を通じ合わせているとは言えない。

小説における移動は，州や国境を越える地理的移動だけではなく，文化的・社会的な移動と変容が伴い，アメリカやその他の国々において既存の境界が無効となる様子が見られる。裕福な家庭の出身である Kaushik の母は階層文化的差異から，Hema の母とはインドでは出会うことも交流することもないと考えられている。多くのインド系移民を受け入れることにつながった 1965 年の移民法改正にも触れ，Kaushik の父親はそれ以前から資格を持ち，家族でアメリカに住んでいたことに言及している。幼い Hema は，Kaushik の 3 人家族の「12 人は飛べる値段」(292) のファーストクラスの座席での旅，新しい家探し，消費する洋服，化粧品，食品に注目して，自分の家族とのライフスタイルの違いを発見している。しかし，アメリカにおいては同じインド系として Hema の家族は Kaushik の家族を親族のように受け入れ，Hema の両親は Kaushik の家族が家を見つけるまで滞在させる。Hema は同じインド系の家族にも多くの生活習慣の違いを見出し，インドに対しての考え方にも大きな影響を受ける —— "'Bombay is nothing like Calcutta,' you added, as if reading my mind. 'Is it close to the Taj Mahal?' 'No.' You looked at me carefully, as if fully registering my presence for the first time. 'Haven't you ever looked at a map?'" (241). アメリカで育ち，インドをつまらない場所だと考えている Hema に対し，Kaushik は彼女のインドに対する知識の乏しさに気づかせる。ボンベイがコルカタとは全然違うと話す Kaushik から影響を受け，ボンベイの場所も知らない彼女に自分のルーツに関心を持つきっかけを与える。その後，成長して再会した 2 人の違いが，関わる時空間の違いによっても表される場面がある。

> Almost always, an international news channel played without sound on the small television in Kaushik's apartment. His work depended wholly on the present, and on things yet to come. It was not the repeated resurrection of texts that had already been composed, of a time and people that had passed, and it made Hema aware of the sheltered

quality not only of her life but her mind. (315)

Kaushik のアパートでいつも小型のテレビに国際ニュースが音声なしで映っているのを見て，彼の仕事が自分とは違い，現在または未来のことに関わっていることを意識する。そして，Hema の方は考古学者として既にある文書から，「過去の時間や人々を，何度もよみがえらそうと」(389) する作業を行い，「閉じた空間で守られてきた」(389) ことを自覚する。Hema と Kaushik は双方共に空間越境的かつ時間越境的な存在であるが，その関係は点で重なり，交差し離れていくようである。

Hema は Kaushik が世界各地で撮影した写真を見ることを通して，彼が地元の人々と通じ合う特別な力を持っていることを知る。同時に，いつでもその場から立ち去れるように移動の衝動に対する準備を整え，パスポートをポケットに入れた状態で，仮暮らしの生活を送っていることを理解する。

> As she [Hema] looked at the pictures, she began to appreciate his ability, perhaps his need, to connect to strangers in this way, and the willingness of strangers to connect to him. She began to understand his willingness — and she thought perhaps this was also a need — to disappear at any moment. He lived in a rented room with rented furniture, rented sheets and towels. In the corner his camera bags and tripods were always packed, his passport always in his pocket. (315–16)

定住しない生活を求めてきた Kaushik であったが，Hema と再会した頃には「生活を変えたい」(381–82) と香港で写真部デスクとして勤務する予定であった。それでも，幼少期からの交流を基に，成長してから築いた特別な関係は，Kaushik が Hema との未来について具体的に語ることはなく，結婚という安定を求めるようになった Hema と成就しない。物語の中

心となった関係は破綻し，交互に入れ替わる語りから，おたがいに対する理解が部分的な内容に止まったことは明らかである。

一方，“Unaccustomed Earth”では，親子間の文化差への気づきが中心に描かれている。Ruma は空港で久しぶりに会った父の外見の変化に驚く。

> He was wearing a baseball cap that said POMPEII, brown cotton pants and a sky-blue polo shirt, and a pair of white leather sneakers. She was struck by the degree to which her father resembled an American in his old age. With his gray hair and fair skin he could have been practically from anywhere. (11)

久しぶりにあった父の外見や身体的特徴がアメリカ生活の年数に従って適応するように変化し，「すっかりアメリカ人らしくなった」(20) ことに気がつく。登場人物の服装・ファッションの描写にもそれぞれの性質が反映されている。父は服装からも「アメリカ人」に見えるようになったが，母はアメリカにおいてもインドの伝統的な民族衣装であるサリーを着続けていた。新しいテクノロジーや文化も取り入れてアメリカのみではなく，新しく海外にも旅行しながら生きる父は，伝統にこだわり，変化しないことを美徳した母親と対照的に比較されている。風貌の描写からも，父が新旧およびインドとアメリカの文化に対して，越境的な存在であるように見える。さらに，滞在中の父はアメリカ風の料理も喜んで食べるなど，自立して一人暮らしができる生活習慣を身につけていることを新しく発見する。

> She had not know how self-sufficient he could be, how helpful, to the point where she had not had to wash a dish since he'd arrived. At dinner he was flexible, appreciating the grilled fish and chicken breasts she began preparing after the Indian food ran out, making do with a

can of soup for lunch. (47–48)

食に対する傾向は，アメリカ文化への適応度を示す指標となる。父は以前とは異なり，常食しているインド料理以外にも，孫と一緒にシリアルやピーナッツバターサンドを食べ，グリルした魚や肉，缶のスープなどのアメリカの軽食もこだわりなく食べてくれるようになっており，食行動からもライフスタイルの変化を実感する。Lisa Lowe はアジア系アメリカ人たちは政治的な戦略として積極的にカテゴリーとしての「アジア系アメリカ人」を利用してきたが，そのため，不可視化された実際の人々の間の多様性を重要視すべきであるという（23）。Lahiri は共通点の多い同じインド系の移民１世，２世の登場人物たちの生活習慣やライフスタイルを描き出すことを通して，その文化的差異も顕在化させている。

母の記憶と亡霊

Kaushik は仮住まいでの生活を長い間求め過ごしてきたが，祖国から遠く離れ，ディアスポラにある Lahiri の登場人物たちにとって概念としての“home”を具象化する「家」は特別な意味を持つように見られる。家族とともに家が「故郷」のようであり，家族の歴史と過去の記憶を体現する象徴となっている。“Unaccustomed Earth”の Ruma に昔の家と一体化して母の記憶が残る。Ruma は父が母の死後，家族の思い出がたくさん残る家をあっさりと売ってしまったことに衝撃を受ける。

> Ruma knew that the house, with the rooms her mother had decorated and the bed in which she liked to sit up doing crossword puzzles and the stove on which she'd cooked, was too big for her father now. Still, the news had been shocking, wiping out her mother's presence just as the surgeon had. (6)

父は，家を売る契約を済ませてから知らせてきたが，Rumaの考えでは家を売ったことは，外科医が行ったように，母の存在を抹消したことのように感じられている。また，Rumaは母の死から3年半で，次第に母の記憶が薄れてしまうことを実感し，「母と暮らした時間は何千日もあったはずなのに，いつも思い出す場面は限られたものだ」(336) と失われていく記憶について想う。

Kaushikの母も，その記憶が家と強く結びつけられている。末期がんを患う母は終の棲家となる家探しと美しい家を作るためのインテリア作りに，死を迎えようとしているにも関わらず努力を惜しまず，それが元気の源となっていたことを思い返す。

> His mother had set up households again and again in her life. It didn't matter where she was in the world, or whether or not she was dying; she had always given everything to make her homes beautiful, always drawn strength from her things, her walls. (309)

母亡き後の家には後妻が入ることになるが，生前に家作りに情熱を注いだ母の存在感は消えない亡霊のように残り，ついに家を手放すこととなった。

> "We are both moving forward, Kaushik," my father told me after the ceremony. "New roads to explore." And without our having to say it, I knew we were both thankful to Chitra for chafing under whatever lingered of my mother's spirit in the place she had last called home and for forcing us to shut its doors. (293)

そして，Kaushikの卒業と同時に家族の思い出を留める家を売り，父は息子に過去を克服し，前に進むことを，「新しい道の開拓だ」(361) と促す。このように家は特別で大切なものであるが，異国において維持することの

難しい仮住まいの場であることは，ディアスポラに生きる人々の生活とアイデンティティを象徴的に表しているようである。成長して写真家を職業として，スーツケース１つで世界中を旅する生活を送るようになったKaushikは「住んでいる場所に信頼を寄せたこと」(382) がなく，拠り所としてもいない。

> Kaushik never fully trusted the places he'd lived, never turned to them for refuge. From childhood, he realized now, he was always happiest to be outside, away from the private detritus of life. That was the first thing he'd loved about taking pictures —— it had gotten him out of the house. (309)

子どもの頃から「小さく固めた生活空間」(382) を好まず，「気持ちが楽なのは家の外」(382) であったKaushikは写真が好きになり，職業とするまでに発展させていく。写真は外に出ることの理由になった他にも，Kaushikに特別な意味を持ってきた。父と再婚相手とその子どもたちと過ごすクリスマス休暇には，いつも持ち歩くカメラを「今回は，何の記録も残したくはないという意識から，あえて持って」(345) こない。アジアへと拠点を移す考えでいるKaushikは，ローマの街角で「ここへ来るのも最後だろう」(384) と記憶に残すための写真を撮ろうとする。Kaushikにとって写真は意図的な記憶形成と保存のためのツールとなっている。残したい記憶を記録として残し，そうではないものは写真に撮らないという判断をし，新しい「家族」との写真は撮らない。父と再婚相手とその子どもたちが住む家の中にあり，靴の箱にしまわれていた母との思い出の写真をカナダ国境に近いアメリカ最東端の州立公園の崖にある絶景の場所まで車の旅をして持ち運び，固い地面を掘って箱ごと埋めた。再婚相手の子どもたちに勝手に母の写真を見られて激怒したKaushikが，逃避の旅の末にしたこの行動はKaushikと母との思い出を自分だけのものとして保存する行為であり，Kaushikが思い出に昇華することのできない母との別れの儀式の

ように見える。子どもの頃に外に出ることの理由であった写真は，「こんな仕事をしていれば，自ずとアメリカを離れていられる」(378) とアメリカを離れる正当な理由を与えている。Hema にとって写真は，Kaushik を知る重要な手がかりであり，情報源となっている。Kaushik の写真を見せてもらい，整理を手伝うことを通して彼の過去，人とのコミュニケーションの取り方や関心事を知る。彼と離れたときには，所在について，新聞やウェブサイトに載せた彼の写真から知ることができた。

Lahiri の作品においては「死」が特別な意味を持ち，多用されている。死のイメージは移民経験と結びつけられて移民とその人々の人生の厳しさや儚さを現実的かつ象徴的に表している (Chakraborty 814)。死は過去の記憶を呼び起こし，ディアスポラの人々の喪失の経験が描かれる。Ruma は母の死を乗り越えておらず，折に触れて母を思い出し，現在の状況に対しても母であればどのように行動したであろうかと思いを巡らしている。父親が売ってしまった，かつて家族が住んだ家を思い浮かべてみれば，「まだ母は生きている」(61) と感じ，母が死んだことが信じられない。母を思うことが多い Ruma は「死んだときより身近に感じる」(38) という幻想も抱くが，「もう母との距離はどうしようもなく遠い」(38) という現実も迫り，喪失感を抱く。父が訪ねてきたことをきっかけに，ベンガル語が話せないこと，インドの食事がうまく作れないこと，父との受け答えは母を思い起こさせ，母が亡霊のような存在になっている。さらに，最後には父が誤って残していったベンガル語で書かれた絵葉書を見つけ，母の喪失を最も強く意識させられる。

> Her first impulse was to shred it [the postcard], but she stopped herself, staring at the Bengali letters her mother had once tried and failed to teach Ruma when she was a girl. They were sentences her mother would have absorbed in an instant, sentences that proved, with more force than the funeral, more force than all the days since then, that her mother no longer existed. Where had her mother gone, when

> life persisted, when Ruma still needed her to explain so many things? (59)

Ruma は絵葉書に書かれたベンガル語が読めなかったことから，母が娘にベンガル語を教え切れず，母から何かを教えてもらう機会はもう永遠にないという事実に直面して，葬式のときよりも強い母への喪失感に苛まれる。かつて母はベンガル語を守り，Ruma が英語で話しかけることもできなかったほどであった。しかし，現在の Ruma は「喋ろうとして舌が回らず，文法もでたらめ」(20) になっている。ここでは喪失が言語と結びつき，個人の存在の重要性が言語と関係づけられている。娘にベンガル語を教え切れなかったことに象徴される喪失は，過去／記憶との断絶として，また，その未来への影響とともに表されている。母が生きていたら孫にベンガル語の童謡などを教えることができただろうと想像し，悲しみを深める。Ruma の父も孫にベンガル語で色の示し方を教えてくれている様子を見て，Ruma も息子である Akash にベンガル語を教えようと努力したが，忘れられたことを思い出す。Ruma 自身が十分に言語を身につけていなかったことも大きな理由であった。

> By now Akash had forgotten the little Bengali Ruma had taught him when he was little. After he started speaking in full sentences English had taken over, and she lacked the discipline to stick to Bengali. Besides, it was one thing to coo at him in Bengali, to point to this or that and tell him the corresponding words. But it was another to be authoritative; Bengali had never been a language in which she felt like an adult. Her own Bengali was slipping from her. (12)

このようにベンガル語を巡る想いから，言語が家族の記憶および過去とのつながりの証であり，アイデンティティの拠り所となっていることが垣間見られる。しかし，アメリカで生きていく中でその記憶は維持しがたく，

失われていく運命にあることが示されている。

In Other Words は，Lahiri が言語とアイデンティティの関係に焦点を当てて書いたエッセイであるが，特に“Triangle”（「三角形」）において，Lahiri は言語を「母」になぞらえて擬人化し，その関係性について述べている。その説明の中では「母」がベンガル語，「継母」が英語であり，アメリカで生きるために両方の言語を上手に操らなければならないという重圧を語っている ── “I realized that I had to speak both languages extremely well: the one to please my parents, the other to survive in America. I remained suspended, torn between the two” (149). 母と継母と位置づけた言語の間での葛藤は，「私は二つの言語のどちらとも一体になれなかった」（96）と Lahiri に挫折の経験をもたらす。そして，その後「母と継母も拒否」（99）し，逃れて辿り着いた「自立した道」（99）として特別な役割を持つのがイタリア語である ── “I think studying Italian is a flight from the long clash in my life between English and Bengali. A rejection of both the mother and the stepmother. An independent path” (153). Lahiri はこれら３つの言語が彼女の中で「三角形」を成し，現在は均衡を保っているという。Silvia Lutzoni は Lahiri の「複層的アイデンティティ」（multi-layered identity）と言語の関係について検証している。*In Other Words* から Lahiri の「言語的亡命状態」（linguistic exile）について指摘し，英語を捨て，ローマに移住してイタリア語で創作活動を行っていることも，「第三の場所」を求めたポストコロニアルなアイデンティティ探求の一環であるとしている（Lutzoni 2017）。このように言語はアイデンティティ形成に大きな役割を果たしていることが示されている。

“Hema and Kaushik”における２人の関係は，Hema の幼少の頃からアメリカで始まり，ローマという「コルカタに似た街」（370）で再会を果たす時間と空間を越えたものである。Kaushik は Hema と会うことのない時期に直接には関わりのない場面でも，しばしば「きみ」として Ruma を思い出していた ── “That is probably the last time I remember you from that period...” (256). Kaushik にとって Hema は家族の記憶でつながる関係

で，彼女を求めることは過去を蘇らせたいという欲望にも見える。Hema も Kaushik の母の話を持ち出し，それによって親密さを増したように感じている。Kaushik は彼が覚えている母のことを同じく思い出せる人と関係を持ったことはなく，「彼女のように過去をわかってくれる人はいない」（402）と考え，関係を断ちたくないと思うようになる。Hema に再会する機会を得て，彼女とは母の記憶を絆として関係を再構築しようとしたように見える。

Kaushik の母は彼の意に反して，墓の下に埋葬されることを好まず，希望通りに死後はボストン北東のグロスター沖に散骨される。ほとんどの遺留品は，アメリカのインド系の友人・知人に分けられ，金の装身具は実家のあるコルカタへと分散した。そして，Kaushik はタイの海において，母の姿を幻覚として見る ── “And alongside Henrik, for a moment, Kaushik saw his mother also swimming, saw her body still vital, a brief blur that passed as effortlessly as the iridescent fish darting from time to time beneath the boat” (330–31).

母の存在を感じた Kaushik は，海を「こわがっていないことを母に見せたい」（408）と泳ぎ出す。母の身体の一部は分散し，形としてはどこにも存在していないが，アメリカの海に散骨された Kaushik の母は亡霊となり，移動し，漂流しているように描かれている。物語の最後では Kaushik も最後には水難に遭ったことが暗示され，母と同様に海に消えて無くなってしまう運命を辿る。

このように，死後も現在／未来の子どもたちの生活や関係性に影響する存在感を持つ物語の母たちは，生死の世界において越境していると読むことができる。Kathleen Brogan は，エスニック・アメリカ文学の中の亡霊の「文化的憑依」（cultural haunting）について説明している。

> A both presence and absence, the ghost stands as an emblem of historical loss as well as a vehicle of historical recovery. It offers writers who take as their subject the survival and transformation of

> ethnic cultures, who recognize disconnection even as they assert continuity, a particularly rich metaphor for the complexities of cultural transmission. (Brogan 29)

エスニック・アメリカ文学においては，母の亡霊は文化伝達の複雑さのメタファーとなり，歴史の喪失と変容，そして回復を表すものと解釈される（Brogan 29)。Lahiri の作品の亡霊となる2人の母たちもまたディアスポラ主体であり，失いつつある過去の記憶を象徴的に表している。

疎外とコミュニケーション不全

これまで見てきたように，登場人物たちはアメリカ内外において社会的地位を確保し，グローバルに旅をする自由と特権を得ているが，ほぼ一様にコミュニケーションの問題を抱え，疎外感を感じている。それぞれ男女に対する伝統的価値観と役割や信頼関係の構築に悩み，葛藤していることは，ディアスポラの経験が個人に及ぼす影響としても見ることができるであろう。ディアスポラに生きる登場人物たちはアイデンティティの問題も絡み，男女・家族関係に困難を感じ，十分克服するには至らない。

“Unaccustomed Earth”において，Ruma の父と母の間には生前に不和の問題が生じていた。Ruma と父は，彼女が思春期の頃からコミュニケーションがうまく取れず，親子は最後に一定の理解に至るが，そこにはまだ断絶があることは否定できない。Ruma は伝統的価値観を維持することを美徳として生きた母とも衝突が多く，母は行動に対して批判的であった。子どもを持ち，Ruma も母になったことによって，態度が緩和されるようになった。また，Ruma も親として3歳の息子 Akash の育児に困難を感じており，アメリカで成長するにつれて親に反抗的になっていくことを予想し，不安を抱えている。そして，Ruma と夫の関係においては，育児に追われて孤立する彼女は，孤独と不安から不満を募らせてきているが，留守の多い夫は仕事が多忙でそのことに気がつくことができない。

“Hema and Kaushik”の物語では，Kaushik の母が乳がん闘病の末に亡くなり，その傷が癒えないままに過ごしていた。しかし，父は妻の死後 3 年ほどで 2 人の子どもがいるインドの女性 Chitra と再婚したことについて，Kaushik は理解しようと努めるが不信感と反感を抱いている。インドから来たばかりの再婚相手で，父より 20 歳ほども若い Chitra を受け入れ難い気持ちでいる。亡き母が暮らしていた家に Chitra が入って過ごしているのを見ると，何かと比較してしまい，思わず批判的な言動を取ってしまう。Chitra の方は夫と死別し，10 歳の Rupa と 7 歳の Piu という姉妹の子どもたちを連れてアメリカに来た。Kaushik は再婚によって父親を同じくし，自身も幼い頃にアメリカに渡って苦労をしたことから，姉妹に同情と共感を持つようになる。しかし，あるきっかけから怒りにまかせ，Rupa と Piu の母を巡って，取り返しのつかない暴言を吐いてしまい，関係の構築が絶望的なものとなる。Hema と Kaushik については，前述したように家族同士のつながりで幼い頃からの知り合いであり，成長してイタリアで再会し，関係を再構築する機会を得るが，2 人の関係は未来が具体的に見えないまま，発展せずに終わってしまう。

Lahiri は移民 2 世の作家であるが，彼女が描く移民 1 世と 2 世，そしてその関係性には共通点がある。1 世である親世代はアメリカという新しい環境に適応するたくましさと強さを持ち，柔軟に変化を受容し，新しい国に適応しようとする力を見せている。しかし，文化と世代による価値観の違いから，子どもたちに対する理解とコミュニケーションには困難を感じており，十分に心を通じ合わせられない。2 世はそのように伝統的かつ受動的に感じられる価値観を持つ両親に対して反感を抱き，しばしば衝突する。それでも，反抗期を過ぎた 2 世は 1 世が辿って来た道を知り，思いを巡らせ，その強さに敬意を示すようになる。そして，2 世はアメリカで生まれ育ち，社会的地位を確立するのにも関わらず，一様に問題を抱えているように見える。2 世は女性は不倫関係，結婚，出産，育児などに悩み，男性は直接的なアメリカへの適応問題の他にも不安や葛藤，自己嫌悪を抱えている。

ディアスポラとアイデンティティ

多様なインド系登場人物のグローバルな地理的移動とそれに伴う文化の移動や変容を描くことは，インド系の人々がディアスポラ主体であることを顕在化させる。Hema と Kaushik では，ローマにおいて「どの場所にも属しているという気がしない」(396) ということで共感する。*In Other Words* においても Lahiri は「亡命」(exile) について言及しており，登場人物たちと作者自身が重なる。

> Those who don't belong to any specific place can't, in fact, return anywhere. The concepts of exile and return imply a point of origin, a homeland. Without a homeland and without a true mother tongue, I wander the world, even at my desk. In the end I realize that it wasn't a true exile: far from it. I am exiled even from the definition of exile. (133)

インドもアメリカも「祖国」と感じ得ず，母語を持たない Lahiri は「亡命」の定義にも自身が当てはまらず，疎外されていると考えていることは，アイデンティティ形成に多大な影響を与えていると考えられる。

Ruma の母は彼女が白人男性を夫にしたときには，娘の「インド人であること」に対する否定的な感情と捉えて批判していた —— "'You are ashamed of yourself, of being Indian, that is the bottom line,' her mother told Ruma again and again. She knew what a shock it was…" (26). 一方で，Ruma も息子 Akash が，成長するにつれ，「アメリカの子」(23) になり，親に反抗的になっていくことを心配している。ここでは，「インド人」であることと「アメリカ人」であることの両方が否定的に捉えられており，自己形成が困難となる背景として解釈できる。

そのような中で，Ruma の父は孫と過ごす日々を通じて，ヨーロッパ系の「アメリカ人」との混血である幼い孫に対し，自分の子どもたちには感じられなかったつながりを見出す不思議な経験をする。

> By the time his wife was Ruma's age, their children were already approaching adolescence. The more the children grew, the less they had seemed to resemble either parent ── they spoke differently, dressed differently, seemed foreign every way, from the texture of their hair to the shapes of their feet and hands. Oddly, it was his grandson, who was only half-Bengali to begin with, who did not even have a Bengali surname, with whom he felt a direct biological connection, a sense of himself reconstituted in another. (54)

自分の子どもたちは大きくなるにつれ，どっちの親にも似ておらず，髪の毛の質から手足の形まで違っていて「何もかも外国人のよう」(70) に見えた。しかし，孫の Akash に対しては半分だけベンガル人で，ベンガルの姓も名乗らない孫であったが，「直系のつながり」(70) を感じ，「わが身の生まれ変わりのようにさえ思う」(70) という心境になる。ここで Ruma の父にとって混血の孫の存在は，子どもたちを巡る葛藤を乗り越え，消えゆく家族の過去と未来を確かにつなぐ可能性とも見ることができる。

“Hema and Kaushik” においても，ディアスポラのアイデンティティ形成の難しさが表されている。ローマ遺跡のある地方都市ヴォルテッラを訪ね，生まれ育ってここで一生を終えると思われる人々を見て，Hema は「わたし，どこにも根づいた気がしないから」(396)，そのような人々が「うらやましい」(396) と話す。Kaushik は少年時代にアメリカを離れてインドに帰国し，7 年後にインドからアメリカに再移住している。大人たちから反抗期もあり，「あいつはアメリカに出るにも腹を立て，また戻っても腹を立て」(295) とアメリカへの適応の問題を抱えていると見られていた。Kaushik 自身も「あの二度の移住は，少年時代の大変動だった」(382) と思い返し，その後の人生にも影響する重大な経験であったと語る。大学卒業後の放浪の末，写真家となり世界各地を渡り歩くようになった Kaushik は，インドともアメリカとも離れて生活し，外見からインド系であることも他の人々からわかりにくくなっていった。

> Like the Mexicans and Guatemalans, the Salvadorans were never sure what to make of Kaushik, not the soldiers who patrolled the streets with guns nearly as big as their bodies, not the children who posed eagerly for pictures when they saw him with his camera. (303)

しかし，Kaushik は，ローマで友人のホームパーティーに呼ばれた際に，他に知り合いの考古学者の「インド人女性」も参加するということを事前に知らされる。Kaushik はそのインド人女性について，サリーを着て眼鏡をかけた中年のステレオタイプ的な「インド人女性」を想像する。そして，インド人女性が来ると言われたものの，自分とインドはほとんど関わりがないと感じ，違和感を覚える。

> There would also be an Indian woman, Paola said ── a scholar, a friend of a friend of Edo's. He pictured someone middle-aged in spectacles and a sari, an archeologist like Edo. He had so little to do with India. He had not gone back since the year his mother died, had never gone there for work. As a photographer, his origins were irrelevant. And yet, in Rome, in all of Europe, he was always regarded as Indian first. (310)

成人してからインドとは関わらずに生き，母が死んで以来，訪ねたことがない。仕事でもインドとは無関係である。しかし，Kaushik はヨーロッパにおいては第一にインド系として認識され，外見によって一方的に定義されている。このことは *In Other Words* に書かれている Lahiri のイタリアでの体験とも重なる。買い物をしているときに外見で判断され，イタリア語で話しても，英語で話しかけられ，英語で返答される苦い経験について書いている ── "Here is the border that I will never manage to cross. The wall that will remain forever between me and Italian, no matter how well I learn it. My physical appearance" (137).

おわりに

これまで見てきたようにLahiriのディアスポラの主人公たちは，メディアが主に表象してきたステレオタイプ的なインド系の姿とは異なる。登場人物たちは「アメリカ人」としてのアイデンティティの探求を意識的には行わず，定住する「場所」を持たず生活しているのが特徴的である。Daiya Kavitaは南アジア系アメリカ文学における脱植民地化された主体は，グローバリゼーションに対応したトランスナショナルでインターエスニックな連帯の必要性を示唆しているとし，また，このような作品が「アメリカ」を地方化させるカウンターナラティブとなっていると指摘する（211）。主人公たちにはこれまでヨーロッパ系アメリカ人やアジア系アメリカ人たちが求めた「アメリカン・ドリーム」を追う姿はない。Lahiriの登場人物たちの旅は継続的でグローバルなものであることが特徴であり，アメリカは終着点ではなく，より良い人生やキャリアなどを求める通過点に過ぎず，それゆえアメリカへの幻滅もない（Friedman 114）。

アジア系のディアスポラを描くLahiriの作品は前述のAsian global narrative（Ty 2010）やDiasporic cultural fiction（Bromley 2000）と呼ばれる新しいジャンルの作品としての特徴を持っている。Diasporic cultural fictionの特徴は以下のように説明されている。

> Each narrative is a fictional exploration of the complexities of belonging and identity, the shifting and cross-cutting cultural experience of diaspora and relocation…. Each text is generated out of a particular, but significantly different, migrant or post-colonial condition, and each text is concerned with the denial of identity, both within the marginalized community (in the case of women) and by the dominant culture…. They are multi-lingual, polyvocal and varifocal, inter-textual and multi-accented; the relationship between dominant and subaltern is destabilized. The location of each narrative is a

cultural border zone, always in motion not frozen for inspection…. (Bromley 4)

消極的な受容を越え，積極的に行うディアスポラ・アイデンティティの形成は，maintenance（維持）と negotiation（折衝）の行為の上に成り立つ。つまり，“being”（maintenance）であると同時に“becoming”（negotiation）であるという。そして，このような新しいハイブリッドな文化とアイデンティティを理解することは,「ホスト」国との関係を変化させることにつながり, 主流文化に対しても影響を及ぼす可能性を持つ（Bromley 9)。グローバリゼーションは単一化，階層化，分離の側面を持ち，否定的に語られることも多い。しかし，同時に肯定的な側面もあり，多文化性や複雑性の統合のあり方，消費動向，社会と文化の関係性などについて，新しい方向性の発見へと導く可能性もある。また，従来のヘゲモニー的な関係を壊し，権力と支配を超えた物語を産み出すことにつながる（Bromley 16)。

Lahiri の作品は，既存の価値を相対化し,「家」や「祖国」の定義について問いかける。さらに，あいまいさや流動性がもたらす移民のライフスタイルの変化について，境界を越えて，より良い生き方を示唆する可能性について評価されている。また, このようにライフスタイルについて再考し，試行錯誤することが，より良い移民たちの関係性に発展するというメッセージを与えている（Farshid 4)。Lahiri は移民ディアスポラについて，多くの問題も描写しているが，肯定的にも捉えている。登場人物たちの多くが，それぞれの興味関心を追求して成果を職業選択に結びつけ，アメリカ国内外で機会を得て評価されるような職業に就き，社会的地位も得ていることもその一つである。以上のように，本論文では Lahiri の作品におけるグローバルで越境的な「移動」と多様化する現代アメリカの主体としてのディアスポラのインド系の登場人物と物語について分析した。Lahiri はインド系の人々の間の文化的差異を繰り返し詳細に描き，提示することによって多様性を明らかにすると同時に人種的ステレオタイプを排除する。

作品では二項対立概念の呪縛から解き放たれ，より流動的であいまいさに開かれた複雑な主体意識が描かれている。このような「新アメリカ人」の表象は現代アメリカの個人を映し，既存の「アメリカ」を相対化するものであり，また，アジア系アメリカ文学，そしてアメリカ文学においても新たな視点を付与するものであると考えられる。

注

本論は 2012 年の日本英文学会北海道支部大会においての研究発表「Jhumpa Lahiri の *Unaccustomed Earth* における『新アメリカ人』の越境とグローバリティ」を原型として，*Unaccustomed Earth*（『見知らぬ場所』）の考察と自伝的エッセイである *In Other Words*（『べつの言葉で』）をあわせて再検討の上，発展させたものである。本研究は JSPS 科研費 JP15K21311 の助成を受けている。

Lahiri 作品の日本語訳については *Unaccustomed Earth* は『見知らぬ場所』（小川高義，新潮社，2008 年），*In Other Words* は『べつの言葉で』（中嶋浩郎，新潮社，2015 年）の既存の訳を参考にさせていただいた。

引用の作品のページ番号は，英語については原作，日本語訳については翻訳書によるものである。

1 短編作品集 *Unaccustomed Earth*（2008）に本論で扱う“Unaccustomed Earth”および“Hema and Kaushik”が収録されている。なお，“Hema and Kaushik”は 3 つの短編作品（“Once in a Lifetime,”“Year's End,”“Going Ashore”）から構成される連続した物語である。

2 *In Other Words*（2016）は，Lahiri が *In Altre Parole*（2015）としてイタリア語で書かれたエッセイの英語翻訳書である。この作品を書いたことについて，Lahiri は「言語実験」と捉えており，彼女の希望で自身では英語の翻訳は行わず，Ann Goldstein に翻訳させている。

3 米国国勢調査によるとインド系の人口は 1960 年の 8736 人から 2010 年には 318 万人に増加している。

4 インタビュー“My Two Lives; The Pulitzer-winning writer felt intense pressure to be at once ‘loyal to the old world and fluent in the new.’”（*Newsweek*, March 6, 2006.）参照。

参考文献

Brogan, Kathleen. *Cultural Haunting: Ghosts and Ethnicity in Recent American Literature*. UP of Virginia, 1998.

Bromley, Roger. *Narratives for a New Belonging: Diasporic Cultural Fictions*. Edinburgh UP, 2007.

Chakraborty, Mridula Nath, "Leaving No Remains: Death among the Bengalis in Jhumpa Lahiri's Fiction." *The South Atlantic Quarterly*. vol.110, no.4, Fall 2011, pp.813–29.

Chatterjee, Antara. "The Short Story in Articulating Diasporic Subjectivities in Jhumpa Lahiri." Eds. Maggie Awadalla and Paul March-Russel. *The Postcolonial Short Story*. Palgrave Macmillan, 2013, pp.96–110.

Daiya, Kavita. *Violent Belongings: Partition, Gender, and National Culture in Postcolonial India*. Temple UP, 2008.

Farshid, Sima. "The fertile 'Third Space' in Jhumpa Lahiri's Stories." *International Journal of Comparative Literature & Translation*. vol.1, no.3, October 2013, pp.1–5.

Friedman, Natalie. "From Hybrids to Tourists: Children of Immigrants in Jhumpa Lahiri's *The Namesake*." *Critique: Studies in Modern Fiction*. vol.50, no.1, Fall 2008, pp.111–26.

Huan, Su-ching. *Mobile Homes: Spatial and Cultural Negotiation in Asian American Literature*. Routledge, 2006.

Lahiri, Jhumpa. *In Other Words*. Translated by Ann Goldstein. Bloomsbury, 2016.

———. *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008.

———. "Going Ashore." *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008, pp.294–323.

———. "Once in a Lifetime." *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008, pp.223–51.

———. "Unaccustomed Earth." *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008, pp.3–59.

———. "Year's End." *Unaccustomed Earth*. Knopf, 2008, pp.252–323.

Lowe, Lisa. *Immigrant Acts: On Asian American Politics*. Duke UP, 1996.

Lutzoni, Silvia. "Jhumpa Lahiri and the Grammar of a Multi-Layered Identity." *Journal of Intercultural Studies*, vol.38, no.1, 2017, pp.108–18.

Saxena, Neela Bhattacharya. "Peopling an *Unaccustomed Earth* with an New Generation: Jhumpa Lahiri's Supreme Fictional Journey into Human Conditions." *Argument*, vol.2, 2012, pp.129–50.

Taher, Israa Hahim. “Jhumpa Lahiri’s *Unaccustomed Earth* and the Reading of Nathaniel Hawthorne.” *Advances in Language and Literary Studies*. vol.7, no.5, October 2016, pp.137–41

Ty, Eleanor. *Unfastened: Globality and Asian North American Narratives*. U of Minnesota P, 2010.

Waters, Mary C., Reed Ueda and Helen B. Marrow, eds. *The New Americans: A Guide to Immigration Since 1965*. Harvard UP, 2007.

アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学 ── 記憶と創造』大阪教育図書，2001 年。

有馬弥子「ディアスポラの女性の自己再生 ── バーラティ・ムカジーの作品にみるインド出身の女性たち」植木照代（監修）・山本秀行・村山瑞穂編『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社，2011 年。

植木照代「プロローグ ── 21 世紀から展望するアジア系アメリカ人の歴史と文学」アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学 ── 記憶と創造』大阪教育図書，2001 年，pp.v–xxv。

植木照代（監修）・山本秀行・村山瑞穂編『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』世界思想社，2011 年。

小林富久子「移動・越境・混血 ── 最近の日系女性作家における新しい主体意識」『アジア系アメリカ文学 ── 記憶と創造』アジア系アメリカ文学研究会編，大阪教育図書，2001 年。

杉浦悦子『アジア系アメリカ作家たち』水声社，2007 年。

ダレル Y. ハマモト「『動く』アメリカ史 ── アジア系アメリカ人と『移動』の英語 ──」山里勝己編著『〈移動〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房，2011 年，pp.203–22。

ジュンパ・ラヒリ『見知らぬ場所』小川高義訳，新潮社，2008 年。

———．『べつの言葉で』中嶋浩郎訳，新潮社，2015 年。

山里勝己編著『〈移動〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房，2011 年。